様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：３４３１９
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２００４８

研究課題名（和文）　近世紀州画壇に関する基礎的研究

研究課題名（英文）　A Basic Study on Kishu painting circles, in the Edo period

研究代表者
近藤　壮（KONDO TAKASHI）
京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号：60469210

研究成果の概要（和文）：
江戸時代、徳川御三家の一つとして栄えた紀州には、文献の上からでも、200 名を超える画家が活動を行っている。しかし、その実態はほとんど解明されていない。これらの画家の活動の実態を解明するために、①狩野派をはじめとする紀伊藩お抱え絵師に属する画家、②大和絵系に属する画家、③文人画家、以上三つに分類し、作品調査および関連史料の検討を行った。その結果、延べ 50 名を超える画家、500 点を超える作品・史資料のデータを集成し、日本近世絵画史における紀州画壇の新たな位置づけを行うための基礎資料を構築することができた。

研究成果の概要（英文）：
It is possible to know in some old documents that Over 200 people had been active as a painter, in the Kishu Domain which was one of the Tokugawa Gosanke (three privileged branches of the Tokugawa family) ,in the Edo period. However, their activity has been unraveled. I have researched about the paintings and historical documents of Kishu painting circles , in the Edo period. The classification method is as follows. (1)Kano school , and the official painters of Kishu Domain,(2)yamato-e painters,(3)literati (Bunjinga) painters. As a result, I could collect data and photographs that Over 50 painters, 500 paintings and documents. And I could made basic material to position for Kishu painting circles in the History of Japanese paintings, Edo period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：美術史、芸術諸学、日本史、近世絵画、紀州

１．研究開始当初の背景

日本近世絵画史において、紀州は一つの地方、或いは周縁として捉えられている。それはまた研究の蓄積にも起因しているといえる。紀伊藩お抱え絵師についての研究は、『特別陳列　紀伊狩野の絵画―収蔵品を中心に―』（和歌山県立博物館、2003 年）、髙松良幸「紀伊狩野家の画業」（『和歌山県立博物館研究紀要』第 9 号、2003 年）など非常に少ない。これらの研究を受けて発展させた、玉蟲敏子氏による『御用絵師の仕事と紀伊狩野家』（武蔵野美術大学美術資料図書館、2006 年）、また福田道宏氏の「紀伊藩御絵師 笹川遊泉の由緒について」（武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子『近世御用絵師の史的研究―幕藩制社会における絵師の身分と序列―』思文閣出版、2008 年）は、近世絵画史における御用絵師の活動として紀伊藩に着目した点で注目できよう。しかしながら、紀伊藩お抱え絵師の活動としては、全くと言ってよいほど研究が進んでいないのが現状である。

また、紀州の文人画家では、日本の文人画の黎明期に重要な役割を果たした祇園南海が特筆される。研究史としては、『祇園南海・柳澤淇園』（『文人画粋編』第 11 巻・中央公論社・1975 年）で多くの作品が提示され、その後、小田誠太郎氏による『特別展　祇園南海』（和歌山県立博物館、1986 年）で多くの研究成果が挙げられた。しかしながら、この展覧会を最後に、文人画家としての南海研究は、やや停滞しているといってよい。また桑山玉洲や野呂介石については、酒井哲朗氏による『桑山玉洲展』（和歌山県立博物館、1979 年）、『野呂介石展』（同、1978 年）において多くの新出作品・資料が提示されたものの、その後は停滞の一途を辿った。しかし、近年、研究代表者は『特別展 桑山玉洲展』（和歌山市立博物館、2006 年）を企画し、また介石については、安永拓世氏が『特別展　野呂介石展』（和歌山県立博物館、2009 年）を開催するなど、紀州文人画の研究は活況を呈してきている。しかしながら、本研究課題が設定するものは、個々の作家研究、作品研究にとどまるものではない。これら紀州三大文人画家と呼ばれる画家以外に存在した画家たちについては、殆ど研究がなされていないのが現状である。

研究代表者はこれまで一貫して江戸時代の絵画作品をテーマとし、江戸時代における画家たちの活動について、作品と文献史料の両面から研究を行ってきた。近年発表した論文「桑山玉洲研究」（『國華』第 1350 号、2008 年）では、多くの新出作品と資料を提示し、新たな玉洲像を浮き彫りにした。とくに玉洲が二十代のときに著した画論『嗣幹画論』を全文翻刻し、後の彼の著書『絵事鄙言』へと至る道程が如何なるものであるのかを考察した。また、「桑山玉洲の絵画制作記録―『珂雪堂画記』をめぐって―（附・翻刻資料）」『和歌山市立博物館研究紀要』第 21 号、2007 年）、「神宮文庫所蔵『明光浦志』と「和歌浦図巻」」（『和歌山市立博物館研究紀要』第 22 号、2008 年）と相次いで、作品分析および新出資料の紹介・翻刻を行っている。また「野呂介石筆『南紀山水写生帖』について」（関西大学アジア文化研究センター第 9 回研究集会「中国文化の伝播、変容と環流」国際シンポジウム、関西大学、2008 年）において、これまで未紹介であった野呂介石の作品の絵画史的な位置づけを行った。一方、紀州の大和絵師では「岩瀬広隆の生涯と画業」（近藤壮編『特別展　岩瀬広隆―知られざる紀州の大和絵師―』展図録、和歌山市立博物館、2008 年）において、これまで殆ど知られていなかった岩瀬広隆という大和絵師の画業を明らかとした。しかしながら、これらの研究は、画家それぞれの問題を個別に明らかにしたものでしかない。研究代表者は、これら研究の過程で、数多くの画家たちの活動に触れ、そこには紀州という土壌が果たした役割が大きいことを再確認した。そこで、これまでの研究を踏まえた上で、紀州画壇全体へと視野を広げ、江戸時代における紀州画壇の活動をとらえる必要性を痛感し、本研究課題を申請した。

２．研究の目的

江戸時代における紀州の画家については、これまで、祇園南海、桑山玉洲など、画家個人の研究が中心に行われてきた。しかし、その他多くの画家たちについては、全く研究が進んでいないのが現状である。これらの画家たちの新たな作品の発掘と文献史料の分析を行うとともに、紀州で活躍した画家たちの活動を一つの画壇として捉え、その成立と展開について考察を試みることを目的とする。そして、最終的な目的としては、同時代の大坂や京都の画壇との相違を浮き彫りにし、日本近世絵画史における紀州画壇という新たな指標を築くことである。

３．研究の方法

本研究では、江戸時代に紀州画壇で活躍した画家たちを対象とするが、紀伊徳川家に仕えた画家、職業画家、或いは文人画家、教養人の嗜みとし画を制作した人など、画に対する取り組み方は様々である。しかし、その多様性こそ紀州画壇の特質でもある。紀州画壇は、徳川御三家の一つである城下町和歌山の社会の動きとも連動している。

本研究では、まず江戸時代に紀州で活躍した画家たちを網羅すべく、画家の伝記と作品調査を行った。伝記調査においては、大正時

代に編纂された、貴志康親編『紀州藝術家小伝』(1929 年) の精査から始めることが有効であると考える。そして作品調査においては、①狩野派をはじめとする紀伊藩お抱え絵師に属する画家、②大和絵系に属する画家、③文人画家、以上三つに分類し、作品および関連史料の詳細な調査を行った。調査の際には、画家個人の枠に拘らずに、絶えず社会的な動向を見据え、紀州画壇という枠組みの中で捉えるように試みた。そのためにも、作品だけではなく、史料の調査・検討も重視して行った。即ち、紀伊藩お抱え絵師の場合は、藩からどの程度の俸禄をもらっていたかという藩政史料や藩士の日記類、文人画家の場合は、画家同士の交流を示す書簡なども隈なく調査し、出来得る限り史料の翻刻を行った。

また、本研究のテーマである近世紀州画壇に関する作品については、図録などの視覚資料が非常に乏しく、カラー図録の刊行、およびデータベースの作成が急務となっている。作品の撮影には、高精度デジタル一眼レフカメラによるデジタル撮影と、中判（ブローニー）フィルムカメラの撮影を併用した。調査作品は、その画像をデジタル出力し、カラーレーザープリンターでプリントアウトし、ファイリングを行った。これは紀州文人画や紀伊藩お抱え絵師など個人所蔵の作品の多くが、未紹介の新出作品であるため、細部や落款印章の比較において、有効な方法であると考えたからである。またさらに調査済みの作品は、作品の詳細データとともにデータベースアプリケーションソフトによるデータベース化を順次行い、近世紀州画壇の全貌を明らかにすべく基礎資料の構築を図った。

４．研究成果

（2010 年度）

研究の初年次にあたる 2010 年度は、まず江戸時代に紀州で活躍した画家たちを網羅すべく、画家の伝記資料調査を行った。伝記資料調査においては、大正時代に編纂された、貴志康親編『紀州藝術家小伝』(1929 年) を精査し、同書に掲載されている画家に関する伝記資料、文献、日記、書簡類等の諸史料の収集を行った。

そして本年度は、近世紀州画壇における画家のうち、紀伊藩お抱え絵師についての作品調査を重点的に行った。具体的な画家としては、狩野興甫、狩野栄興、岩井泉流、山本養和、岩瀬広隆などである。また和歌山市立博物館に寄贈・寄託されている平井コレクション、田中コレクションなどの作品調査を行い、あわせてデジタル撮影を行った。また紀伊藩お抱え絵師の個人所蔵の作品の多くが、未紹介の新出作品であるため、細部や落款印章の比較において、有効な比較検討が出来るように、調査した作品は、その画像をデジタル出力し、カラーレーザープリンターでプリントアウトし、ファイリングを行った。これは次年度以降に予定している画像データベースの構築のための準備段階として位置付けられるものである。

（2011 年度）

研究の第二年次にあたる 2011 年度は、近世紀州画壇における画家のうち、文人画家の作品の調査および資料の収集と分析を重点的に行った。調査対象としては、紀州三大文人画家の祇園南海、桑山玉洲、野呂介石、これら三人の画家を中心として、南海の次男の祇園尚濂、玉洲や介石とも交流を持った松丘、或いは介石の弟子である野際白雪、西郷石鴎、さらに大坂の文人学者で紀州を何度も来訪した木村蒹葭堂の関係資料などの調査を行った。その成果の一部は学術論文「木村蒹葭堂の和歌山来訪について」(「和歌山市立博物館研究紀要」第 25 号・2011 年) として発表した。また、2010 年度に引き続き、紀州画壇における画家の伝記資料調査も継続して行った。具体的には、『紀州藝術家小伝』を精査し、同書に掲載されている画家に関する伝記資料をデータ化し、他の文献、日記、書簡類等の諸史料との照合作業を行った。

さらに、本年度から、作品・資料調査とあわせて、データベースアプリケーションソフトによる画像データベースの構築に着手し、調査した作品資料のデジタルファイリング化を順次行った。

（2012 年度）

研究の最終年度にあたる 2012 年度は、近世紀州画壇における画家のうち、大和絵系に属する画家の作品調査および資料の収集と分析を重点的に行った。この系統に属する代表的な画家としては、冷泉為恭と交流を持った大和絵師・岩瀬広隆と山沢與平があげられる。広隆の作品については、2011 年度までに相当数調査を終えているが、本年度は個人所蔵の作品および版本挿絵を中心に調査を行った。また住吉派の大和絵の名手として当時よく知られた山沢與平については、現存作品は非常に少ないため、作品調査とあわせて、文献史料の調査と分析を行った。また、本年度は紀州藩お抱え絵師の笹川家の作品および史料についても重点的に調査を行った。その成果の一部は学術論文「紀州藩御絵師 笹川家三代の画蹟」(「和歌山市立博物館研究紀要」第 27 号・2013 年) として発表した。

また 2011 年度から引き続き、紀州画壇における画家の伝記資料調査も継続して行った。本年度は、『紀州藝術家小伝』に掲載されている画家に関する伝記資料のデータ化とともに、未掲載の画家、および未紹介の日記、書簡類等の諸史料の翻刻作業を行った。

また、本年度は、データベースアプリケーションソフトによる画像データベースの構築を行い、近世紀州画壇全体を把握するための基礎資料の作成に着手した。

今後は、三年間にわたる研究を総括し、近世紀州画壇における画家の活動、および作品・史料の分析を行った専門的論文を順次執筆し、紀州画壇という包括的な見地にたって、近世絵画史におけるその新たな位置づけを行っていきたい。また更にこれまで蓄積した史料と作品とを照合し、詳細データとともにデータベース化し、当該分野の基礎資料として、出版も視野に入れて公開したい。そして引き続き新たな史料と作品の発掘にも努めていきたいと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①近藤壮、木村蒹葭堂の和歌山来訪について、和歌山市立博物館研究紀要、査読無、25 号、2011、38-47
②近藤壮、祇園南海の芸術世界―新出作品・資料を中心に―、図録・祇園南海とその時代、査読無、2011、85-90
③近藤壮、蒹葭堂と紀州（和歌山）、蒹葭堂だより、査読無、12 号、2012、3-5
④近藤壮、新出の木村蒹葭堂筆「名花十二客図」と青木木米、美術フォーラム 21、査読無、26 号、2012、4-9
⑤近藤壮、紀州藩御絵師 笹川家三代の画蹟、和歌山市立博物館研究紀要、査読無、27 号、2012、15-28

６．研究組織
(1)研究代表者
近藤　壮（KONDO TAKASHI）
京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号：60469210

(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし